

高校中退を防ぐには

生徒指導提要 活用の視点

令和3年度の高校中途退学者は3万9千人弱で、5年前より約8千人・10年前より約1万5千人の減少となっています。積極的な進路変更ということもあり得ますが、中途退学者は中学校卒業資格となり、その後の進路の多くの選択が絶たれることを考えれば、減少は望ましいといえます。

では、どうすればさらに減少させられるのでしょうか。この問題を考える上で、「学校はもはや行かなくてもよい場所」だということを学校は自覚する必要があると考えます。

定時制や通信制課程など、より柔軟な学習機会を提供する高校も増え、転校も容易になってきました。高等学校卒業程度認定試験の活用の可能性もあります。オンライン学習の普及により、今後は可能性がさらに多様に広がっていくでしょう。こうした状況は、「学校に通う積極的な意味や意義」がなければ、学校から離脱する生徒がさらに増えるのは避けられないことを意味します。

このことを考える上で役に立つと思われるのが、ソーシャルボンド理論です。この理論によれば、人を社会につなぎ留めておくものは、大きく四つあります。

- ①「学校はいくべきもの」という「信念」です。
しかし、今日そんな「信念」を振りかざした指導は通用しません。
 - ②「巻き込み」。(部活がある)(委員長だから休めない)という気持ちから学校につながることで、学校が好きであればプラスに働きますが、学校にマイナスの感情を抱いていれば迷惑以外の何物でもなく、学校から遠ざかる要因になります。
 - ③「学校は大学進学などのための投資」という考え方です。
選択肢が学校以外にはほぼない時代には通用しましたが、探せば学校以外の選択肢もある今の時代には通用しません。
- つまり、「信念」や「巻き込み」「投資」では、高校生を学校につなぎ留められないということです。では、どうすれば中途退学を予防できるのでしょうか。その中心的役割を果たすと思われるのが、
- ④「愛着」です。
これは、学級や部活の友達、教師などとの情緒的な絆であり、それが学校からの離脱を阻む要因になるということです。

当たり前と思われる結論ですが、就学前・小学校・中学校での一人ひとりを大切に学級づくりや園・学校づくりが子どもたちの将来に大きく関わってくるといえます。だからこそ、今一度人との関わりを大切に声掛けや協働的な学びを見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。

(日本教育新聞 7/10 の記事より)



特別支援教育の経験

全国から抽出された小学校・中学校・義務教育学校の計1464校の回答から次のような結果が分かりました。

採用後10年以内の教員のうち、通級指導や特別支援学級、特別支援学校での指導経験、特別支援教育コーディネーターのいずれかの経験がある教員の割合は、小学校22.6%、中学校43.0%、義務教育学校が34.4%でした。多いように感じますが、担任に絞ると、**小学校で10.1%、中学校で8.4%、義務教育学校が17.8%**でした。

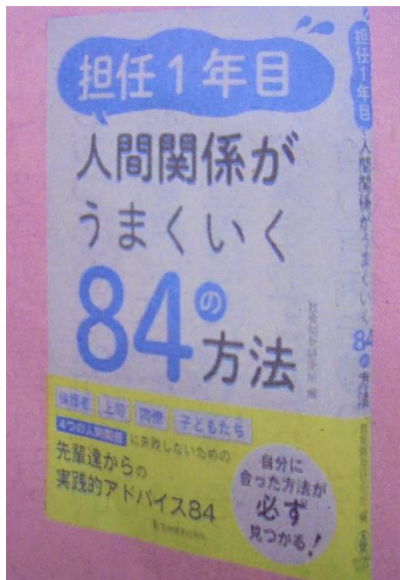
令和4年3月に公表された特別支援教育に関する有識者会議の報告では、特別支援教育に関する教員の専門性向上に向けて養成段階からのキャリアパスなどを提言しています。また、**採用10年以内に全ての教員**が特別支援学級や特別支援学校を**複数年経験**することなどを求めています。

全ての教員で全ての児童生徒を育てるためには、この経験が必要です。同じ役職・ポジションに留まることは、校内の硬直化を進めるだけでなく、教職員一人ひとりの資質向上につながりにくいと考えます。

さて、採用10年以内の教員で何人が特別支援学級担任の経験者でしょうか。あなたの学校は・・・。

読書の秋に おすすめの一冊

「日本教育新聞」書評より



『担任1年目 人間関係がうまくいく 84の方法』

教育開発研究所／編

著者は教育経験豊かな21人の教員。本著には、若い先生たちへのアドバイスとエールがつづられています。教師の仕事に真摯に向き合う先輩たちも、同じように悩んだ経験があり、失敗も経験してきています。それらを乗り越え「今」があります。だからこそ語られる言葉には重みがあり、真実味があります。

本編は、「保護者」「同僚」「上司」「子ども」の4つの人間関係がうまくいく方法として、それぞれ21の項目にして解説しています。84あるタイトルを見て、関心のあるところから読み始めてもよいと思います。

読めばきっと心に響く言葉が見つかるでしょう。そして、また一歩前に進めて行けそうです。



『校長の条件』

寺崎 千秋 著 出版社 教育出版

理想の校長とは、と問われて答える校長像はそれぞれの立場や、管理職との出会い、付き合い方などによって異なるでしょう。

本書は全国連合小学校長会会長などを含むキャリアの集大成の一端であり、著者の知見、経験のみならず、多くの管理職との交流も反映した「校長学」の書といえます。

子どもや教員、家庭、地域など校長が目配りすべき守備範囲は広いです。多くの命を預かる校長は、「最後の砦」であり「決断」と「説明」が絶えず求められる重い職であることが伝わります。文中に垣間見える「本音」に触れ、経営判断に迷ったときに響く、含蓄のある言葉に出合える好著です。



『カラーモンスター きもちはなにいろ?』

作：アナ・レナス 訳：おおともたけし 出版社 永岡書店

いろいろな感情が混じり合って体の色がぐちゃぐちゃになってしまったモンスター。そこで、一つ一つの感情を色分けし、モンスターは自分の気持ちを整理していこうとしますが・・・。

この本では、嬉しい気持ちは黄色、怒りの気持ちは赤など、色で表現されています。これにより、自分の感情と適度な距離が取れ、素直に自分の気持ちと向き合いやすくなります。言葉では表せなかった思いが出てくるかもしれません。

モンスターの感情を知ることは、相手の感情を知ることにともなわれます。アンガーマネジメントにもおすすめの1冊です。

今、あなたの気持ちは何色ですか？

「カラーモンスター きもちはなにいろ?」は、教育相談や通級指導教室でも活用できる本です。絵本は自分の状況や気持ちに気づいたり、整理したりする際にとってもおすすめのアイテムです。

子どもだけでなく、保護者や先生など大人にも読んでもらいたい絵本です！

子どもと一緒に読んでみてはいかがでしょうか。